

## 教員採用試験問題（英語科）の傾向分析

### An Analysis of Employment Examinations for Full-time Japanese Teachers of English

プロジェクト代表者：及川賢（教育学部・准教授）

OIKAWA Ken (Faculty of Education, Associate Professor)

#### 1. はじめに

いわゆる団塊の世代の退職期を間近に控え、優れた教員の確保の重要性も広く認識されつつある。とりわけ、首都圏を中心に、教員採用試験の倍率の低下が目立つようになり、ひいては教員の質の低下につながるなどの懸念も出てきている。そのような状況の中、教員養成を担う本学においては、一人でも多くの優れた学生を教員として送り出すことが社会的責務である。そこで、本稿は、現在行われている英語の教員採用試験問題を分析することにより、どのような英語教員が求められているのかを把握し、より効果的な英語教員養成プログラムを作成するための資料を提供することを目的とする。

#### 2. 目的

本稿の目的は、埼玉県・さいたま市の教員採用試験として出題されている英語の筆記試験問題を分析し、英語教員としてのどのような力量が求められているのかを探ることである。なお、今回の分析は平成 18 年 7 月に実施された採用試験（中学校）を対象とする。

#### 3. 分析

本稿では「必要とされる知識・技能」と「英語力を問う問題の分析」の 2 つの観点から分析を行う。

##### 3. 1. 必要とされる知識・技能

問題形式から判断するに、埼玉県・さいたま市の場合、「英語力」「指導力」「学習指導要領（の知識）」が特に必要とされる。

##### 3. 1. 1. 英語力

試験の柱となる最重要項目で、英語力そのものを問う問題が主流である。面接が別に実施されるためだと思われるが、「聞くこと」や「話すこと」などの音声面よりも、「読むこと」に関する出題が最も多い（次いで「聞くこと」「書くこと」の順）。これは近年盛んになっている TOEIC や英検をはじめとする英語試験と同じ傾向を示している。また、大学入試においても、近年は、いわゆる重箱の隅をつつくような語法問題は大幅に減少しているが、これらと同一の傾向が伺える。

この傾向を受けて、今後必要とされる対策としては、4 技能や語彙・文法などを中心にバランスよく英語力を育成してゆくことが考えられる。特に、まとまった文章を読み取る力と英語を聞き取る力の育成が不可欠である。書く力の育成においても、読む、聞くという、いわゆる受容的技能の育成を通じて、英語をより多く取り込むことを基礎に育成してゆくことが重要であろう。

##### 3. 1. 2. 指導力

これにも様々な側面が想定されるが、採用試験における指導力の評価の重点は模擬授業が主となる 2 次試験に置かれていると考えられ、筆記では「～ではどう指導するかを述べよ」と「テストを作成せよ」などに留まっている。

この傾向を受けて、今後必要とされる対策としては、教材を作成する力とテストを作る力の育成である。これまでの 3 年間で、テスト作成が 2 回、教材作成が 1 回出題されている。過去 3 年分のデータしかない

ので、今後どのような問題が出題されるかは予測の域を出ないが、筆記試験という形式上の制約と試験時間（80分）の制約を考えると、今後も同様の傾向が続くと思われるので、実際に教材やテスト問題を作る練習が必要となるであろう。また、採用試験では、作成の条件がつくことが多い。例えば、テスト問題作成を課した2004年度の【6】では、「内容のまとめり」「評価の観点」「評価規準」などの用語が出てくる。学習指導要領の指導を通じて、これらの用語に精通しておく必要がある。

### 3. 1. 3. 学習指導要領の知識

現行学習指導要領の外国語の文言に関する問題もこの3年間毎年出題されている。具体的には、「外国語」の「目標」を英語で表した文章を読み、空欄を埋める（選択肢なし）「目標」を読んで空欄を埋める」「音声」「文字及び符号」「語、連語及び慣用表現」に関する記述の空欄補充（選択肢あり）などがある。

この傾向を受けての対策は、該当する箇所を覚えることであるが、ただ単に字面を覚えるだけでは不十分で、それらの文言が実際に指しているものを具体的に述べることができなければならない。理解から一歩進んだ実践的な知識が必要とされていることがわかる。

### 3. 2. 英語を問う問題の分析

筆記試験の中心となっている英語力を問う問題を「題材」「難易度」の観点から分析してみる。

#### 3. 2. 1. 題材

「読むこと」を中心とした問題では「一般的な話題」「教育一般に関するもの」「英語教育に関するもの」の3つに分けることができる。ここで問題となるのは、教育一般や英語教育に関する専門知識が必要かどうかということである。確かに、教育一般や英語教育に関する題材の文章が問題文として使用されているものの、問題形式を見てみると、必ずしも専門的知識を必要とせず、文章を読み取る英語力があれば、専門的知識がなくても十分に正答を得られるものである。教育一般に関する文章も同様で、題材として取り上げているものの、解答するために絶対に必要な知識だとは言いきれない。

しかし、だからといって、教育一般や英語教育の専門知識が不要ということにはならない。いずれの問題文も十分な英語力があれば専門的知識がなくても対応できるが、それらの背景知識があれば、スキーマを活性化して、読解の助けになる可能性は高い。関連する英語の文章を読むことに慣れておくことで、英語力そのものの向上と専門知識の増大を同時に図ることができ、ひいては、求められる英語教師像により効果的に近づける可能性が考えられる。

#### 3. 2. 2. 難易度

Flesch-Kincaid Grade Level で難易度を測定したところ、日本人にとって難度の高い文章がほぼ毎年のように出題されていることが明らかになった。この傾向を受けて、今後必要とされる対策としては、難度の高い文章を読み込む力の育成が必要となる。「題材」での傾向分析の結果と併せて考えると、日本で発行されている英字新聞やネイティブスピーカーの英語教師が読む英語教育専門書を読めるだけの力を育成してゆく必要があるだろう。

### 4. 今後の課題

今後は調査の範囲を広げ、各自治体で求められている力を探り、共通するものがあるのか、あるとすればどのような力が求められているのかを明らかにし、教員養成学部を持つ大学として社会の要請に応えられるカリキュラムを作成する上での資料を提供することが必要である。